

# 2014年度自己点検・評価報告書(シート)

## 【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

### 《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

### I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	神学研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.4 成果
小項目	6.4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。
要素	学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用 学生の自己評価、卒業後の評価(就職先の評価、卒業生評価)
小項目	6.4.2 学位授与(卒業・修了判定)は適切に行われているか。
要素	学位授与基準、学位授与手続きの適切性 学位審査および修了認定の客観性・厳格性を確保する方策(院)(専門)

### II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

#### 《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。  
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。  
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。  
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 進路も含めた修了生を追跡調査する手法を策定し、実施する。	→追跡調査の実施(2013年度までに)	D	C	C	B	B
2. 学位授与基準、修了認定基準に則った手続きが行われているか検証する体制を整備する。	→審査委員会の報告に対する研究科委員会による手続きの検証実施(2013年度より)	D	C	C	B	B
		☆				
2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

#### 《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 教育成果の指標としての追跡調査は、まだ方法を模索中である。修了生の進路については、例年の調査によりほぼ把握できている。また、伝道者(特に日本基督教団教職など)は継続して奉職先(勤務先)の情報を追っている。2013年度の前期課程修了者の進路状況は次のとおりである。修了者10名(伝道者8名、その他進学準備・留学等2名)なお、専任教員が、新任伝道者の就任式や神学講座などの機会に全国各地の教会へ派遣され、修了生の働きについて関係者にヒアリングを行うなどして教育成果について一定の確認を行っている。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 伝道者育成に関しては、例年一定の成果をあげている[2013年度・8名、2012年度・6名(信徒伝道を含む)、2011年度・5名]。しかしながら、研究者育成としての成果、あるいはキリスト教思想・文化コース生の進路先開拓(研究者以外)について課題を抱えたままである。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 研究者育成について、執筆する論文の質向上へ向けて継続的に努力する。指導体制のほか、「中間発表」時期の変更(2014年度～)や学位取得モデルの再検討およびその実質化に取り組む。キリスト教思想・文化コース生の進路先開拓(研究者以外)については、キャリアセンターをはじめとする全学の動向にも注意を払いながら、十分な伸長策を模索する。	☆
		その他	☆

目標2	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 「博士論文審査基準」「修士論文審査基準」を明示し、2013年度の部内公開・試行を経て、2014年度には正式に運用を開始している(学生配付の『履修の手引』にて公開、論文審査評価シートに明記するなど)。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か	
		各教員が、審査基準項目を念頭に置きながら論文指導を行っており、それを口頭試問にも活かしている。FD研修会(研究科)においては「修士論文審査基準」に照らしての論文審査とその妥当性について意見交換を行った(2014年6月)。計7項目の各々についてどのように評価を検討し総合評価を与えるかにおいて、教員間で認識の違いがみられた。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か	
		2015年度に学則改正を予定しており、それを待って「学位取得までのプロセス」の再整備も行うが、その過程において審査手続きの検証も予定する[カリキュラム委員会(研究科)を中心に]。またFD委員会(研究科)、FD研修会(研究科)などの機会を利用して継続的に議論を行い、今後の検討に活かしていく。	☆
		その他	
			☆
備考			☆